



土木を次世代の技術者に 引き継ぐために



田代 民治

土木学会 第104代会長

私は入社以来30年余り、ダムを中心に現場での施工に従事してきましたが、その経験も踏まえて考えると、最近、現場でのものづくりが変化してきている、極端に言うと少しおかしくなっているように感じています。また、歴代会長の方々とお話しする機会にも、最近の現場でのものづくりについて、「特に品質や安全面で一体どうなっているのか？」との苦言を呈されました。

この根本をたどれば、社会状況が変化し、施工も複雑になり、発注者・受注者ともに、昔のようにプロジェクトを最初から最後までトータルで見ることが少なくなってきたことが挙げられます。その結果、最近の土木技術者の中には、近視眼的になり勘違いをしている人が多いのではないか？と思うところもあります。本年9月に行われた土木学会全国大会・基調講演会でも触れましたが、次の四つの疑問について、改めてここで述べさ

せていただきます。

一つ目は、コストを削っても良いものが造れると思っていないませんか？

自分の大切なものを買う時に、安いだけで選ぶことはないでしょう。先代の残したインフラを私たちが土木遺産として大切にしように、私たちが造るインフラにも、後代に愛され、使い続けてもらいたいという想いが込められているはずです。そのような想いを無視してまで安さのみを追求することがあってはならないと思うのです。これは品確法の基本だと思います。

二つ目は、インフラは造るだけで終わりだと思っていないませんか？

インフラは造った後に一般の人たちに喜んで使ってもらうべきもの、そして長く社会の役に立つべきものです。当然の話ですが、建設時のコスト削減や工期短縮ばかりでなく、耐久性の向上などによ

我々土木技術者として何か勘違い していませんか？

コストを削っても
良いものが造れると
思っていないませんか？

造るだけで
終わり
だと思っていないませんか？

書類を
整えることで現場が
進んでいくと思っていないませんか？

働く人の
安全を
本気で考えていますか？

平成28年度土木学会全国大会基調講演会スライドより

りライフサイクル全体で見た付加価値を高めることが、真にストック効果を生み出す合理的なインフラにつながると思います。

三つ目は、書類を整えることで現場が進んでいくと思っていませんか？

地形、地質などの自然と対峙して物を造ることが土木の本質です。検査書類、管理書類等は当然必要ですが、現場での試行錯誤が加わってこそ、初めて価値あるインフラができるのです。そして、これこそが土木技術者の腕の見せどころだと確信しています。

四つ目は、働く人の安全を本気で考えていますか？

事故に対してペナルティを課す減点主義の発想のみにとらわれず、一緒に働く仲間の安全を最優先で考え、危険作業を減らすための新たな技術（プレキャスト化、ロボット化等）の導入促進や、設計も含めた抜本的な施工方法の改善に取り組むべきだと思います。

国民の安全安心を担うインフラを造る場所で失われる命があつてはならないのです。

これまでのやり方を踏襲するのみの内向きの論理だけでは、これから、若い人たちが女性に入ってきてもらうことは難しくなります。必要なところは思い切って見直し、次世代に受け継げる現場に変えていかなければなりません。

われわれ土木界では技術者や技能労働者の確保が喫緊の課題となっています。加えて、ここで述べたような想いも重なり、ものづくりの原点である現場に立ち戻り、「次世代に繋ぐ現場イノベーションプロジェクト」を立ち上げ検討を進めています。会長任期の一年ですべての課題を解決できるとは思っておりませんが、次世代の土木技術者に引き継ぐための生産現場のあり方を考える第一歩を踏み出したと思つてのことで、引き続き、会員の皆様のご協力をお願い致します。